葛飾区史編さんだより Vol.16

270611

総務部 総務課 区史編さん担当係　03-5654-8444
郷土と天文の博物館　03-3838-1101

平成 27 年 2 月 28 日（土）午前 10 時から、四つ木地区センターにて「昭和の葛飾を伺う会」が開催されました。

多くの方にご参加いただき、四つ木にまつわる様々なお話を伺うことが出来ました。

日本製紐

ものづくりの町として早くから発展してきた四つ木界隈で、もっとも早く設立された工場は日本製紐（にほんせいじゅう）株式会社でした。会社の創立は明治 22 年に遡ります。四ツ木工場の設立は大正 4 年で日本製紐としては 3 番目の工場でした。

真田紐、飾り紐などを製造していたことから地元住民からは「ひも工場」と呼ばれていました。早くから海軍の需要でパラシュートの紐を作っていました。『本田町誌』（昭和 4 年）によるとその従業員は 230 名あまりに達する大規模なものだったようです。

従業員の多くは新潟県や福島県出身の人たちでした。とくに女性が多く、こうした従業員たちは寮や長屋に住んでいました。風呂のない長屋の人たちは銭湯に通うようになります。そのため、銭湯があちこちに作られ、その周囲には飲食店も設けられました。銭湯を中心に小さな市街地が形成されたのです。

地方出身者の見た四つ木

昭和に入ると、四つ木は工場で働く地方出身者が次第に増え、農村から都市へと変化していくようになりました。

新潟県東頚城郡松代町の佐藤武則さんは昭和 12 年、本田渋江町（東四つ木）にあった大和護謨の下請けの工場に住み込みで働くため、故郷を後にしました。佐藤さんが生まれた松代町は新潟県でも有数の豪雪地帯で、昔から男女とも若いときに一度は故郷を離れ出稼ぎに行くものであるとされていました。

佐藤さんは休日になると四ツ木橋の付近にあった商店街や映画館に遊びに出ることが多く、地方出身者の目で四つ木の町を見ていました。まず驚いたのは消防署に消防自動車が二台もあることでした。山奥の松代町には消防自動車そのものがなく、手押しの車にポンプが付いたものだけだったそうです。また、自動車の渋滞という現象も初めて目にしました。休日になると千葉県の中山競馬場に行く車が四ツ木橋に殺到して渋滞したものでした。

食べ物でも「地方とは違うな」と感じることがありました。四つ木の商店街には惣菜屋があって、天ぷらが売られていました。松代町でも祭りのとき天ぷらを揚げて食べることがあったのですが、その天ぷらの衣はべったりとしていたのに対して四つ木で食べた天ぷらの衣はさくっとしてたいへんおいしく感じました。また、山深い松代町では当時は生魚を食べる機会がめったになかったため、刺身は気持ちが悪くてしばらく食べることができなかったそうです。

昭和に入るとさまざまな地方出身の人たちが移り住み、それぞれの視点で四つ木の生活文化を見つめるようになりました。

磨き屋

四つ木はメッキ工場が多い町です。メッキとは、金属の表面を加工して強度を補強したり、装飾を施したりすることです。メッキ工業はさまざまな工程別に異なる業者が関わる分業制をとっていました。

まず、製品のもととなる型を作ります。それを使って「プレス屋」と呼ばれる工場が材料の型抜きをします。通称「けとばしプレス」という足踏みの型抜き機で金属を打ち抜き、製品のもとの形を作ります。これには油がかかっており、メッキをかけるにはドリクレンという薬品で油を洗います。油を洗った後、「磨き屋」と呼ばれる職人が金属を磨きます。メッキが良く付着するかどうかはこの「磨き屋」の腕にかかっているそうです。磨きの作業をするときに使う布を「バフ」と呼ぶことから「バフ屋」とも呼ばれます。「バフ屋」の手を経た後、ようやくメッキを付着する作業が行われます。

メッキは有害な廃液を出すことから、処理施設が不可欠です。工場の公害が問題化された時代の四つ木には中小のメッキ工場が多く、処理施設を設ける経費を捻出することが困難でした。そのためいくつものメッキ工場を集めた「メッキアパート」が四つ木に設けられました。

現在も四つ木には金属加工業、繊維工業などいくつもの業種の工場があります。いずれもメッキ工業のようにさまざまな下請けや内職の人たちが比較的近い場所にいて、ひとつのものづくりを支えているのです。

四ツ木橋の開通

昭和 27 年、従来の木橋を架け替え、四ツ木橋は鉄筋コンクリート製の永久橋として開通しました。当時、都心と千葉方面を結ぶ橋は四ツ木橋と堀切橋しかありませんでした。いずれも荒川放水路の開削にともない大正時代に架橋された木橋で、老朽化が指摘されていました。とくに四ツ木橋は戦時中戦車も通行したのですが、そのたびに大きく揺れ、しなり、橋の所々には隙間が出来ていて人々はときおり荷物を川へと落としてしまいました。

待望久しい新しい橋の開通式は四つ木の町を挙げてのお祭り騒ぎになりました。神輿が出て小学生の演芸会が行われ、地元住民による三代渡り初めが行われました。そのときの写真が現在も数多く残っていますが、そこには喜びの表情があふれる多くの人たちの集まる様子が写されていて、地元の人たちのこの橋への期待のほどが感じられます。当時は、東向島止まりだった都電を延長して葛飾区内に入れる案もあり、国道 6 号線の中央にそのスペースが設けられていました。戦時中はそこに芋を植えたり、子供の遊び場になったりしていました。

新しい四ツ木橋は当時十三間通りと呼ばれた国道 6 号線に架けられました。それまでの四ツ木橋は昭和 44 年に木根川橋が架かるまで残っていましたが、モータリゼーションの発達と相まって物流の流れは変わっていきました。